

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著

『大学授業を活性化する方法』を読む

安藤 友張

近年、日本の大学界におけるファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)活動の高揚によって、大学授業のあり方が真剣に問われている。学生による授業評価を実施する大学が増え、授業改革に関心を持つ大学教師も徐々に増えている。評者自身もFDには関心をもっており、今までにFDをテーマとした様々な研究会に参加し、大学授業に関する文献も数多く読んできた。

本書は、大学授業を活性化すべく学生参加型授業を実践するためにはどのようなすればよいのか、理論と実践の両面から論じたものである。執筆陣であるが、教育心理学者が中心となっており、本書の筆頭編著者の杉江氏は、わが国にお

る「協同学習」研究の泰斗である。本書は、「協同学習」や「LTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法」などの理論を実際の大学授業に応用しながら、学生参加型の授業を実践し、その意義を論じている。受講学生が百名をこえる多人数授業でも、この「協同学習」の方式が実践可能であることを示している。実践事例は、教育心理学をはじめとして、経済学・体育実技・語学・認知科学などの授業実践が紹介されており、ITを活用した実践も取りあげられている。学生参加型の授業に関しては、FDをテーマとした研究会において、取りあげられる機会が多い。

本書の内容構成は以下の通りである。

- I章 学生の参加を促す多人数授業
- II章 「協同学習」のすすめ
- III章 対話による学習モデル
- IV章 コンピュータを利用した協動的な知識構成活動

全体を通してみると、教育心理学の専門用語を使った説明も少なく、読者が理解しやすいようにわかりやすく書かれている。文末表現はすべて敬体で統一されており、読みやすいように配慮がなされている。本書で取りあげられている「協同学習」や「LTD話し合い学習法」の理論と実践は日本の大学界では広く認知されているとは言い難い。しかし、アメリカでは「協同学習」は Cooperative Learning と称され、積極的に取り入れられている教育方法である。事実、Cooperative Learning Center を学内に設置している大学もある。本書の編著者である関田氏が所属する創価大学では、「教育・学習支援センター」を設置し、「協同学習」を組織的に支援するシステムを

構築している。

「協同学習」や「LTD話し合い学習法」では、学生同士の互恵的な人間関係の構築が基盤となっており、学生が相互に助け合いながら学ぶのであり、編成された学習グループは「孤独な学習者の寄り合い所帯」（本書 五八頁）ではない。近年、学生の学力低下のみならず、社会性（対人コミュニケーション能力など）の欠如が指摘され、大学関係者間で深刻な問題となっている。近年注目されている「初年次教育（一年次教育）」において、この「協同学習」などを取り入れながら、学生の学習能力のみならず、人間関係を構築する能力を育成することも必要である。新しい知識の獲得のみならず、授業クラスの仲間同士が切磋琢磨することによって得られる達成感もこの学習方法のセールスポイントである。

学生を対象とした授業アンケート調査を実施すると、学生参加型の授業を望む学生の声が多い。とりわけ、最近の学生

は、座学よりもフィールドワークや体験型授業を好む傾向がある。しかし一方で、グループ討論などの協同作業を得手とする学生は少ない。本書の実践事例を参考にしながら、教師は「協同学習」などが成立するように入念な仕掛けを用意しなければならぬ。例えば、杉江氏の実践では、『教育心理学NEWS』と呼ばれる授業通信を学生の手によって編集させ、定期的に発行している。関田氏の実践では、学習成果をまとめたレポートを学生同士が評価しあう「ピア・レビュー」の手法も取り入れられている。このように、教師と学生のコミュニケーション・学生同士のコミュニケーションを円滑化する工夫がもとめられる。また、グループワークにおける各学生の役割分担（例 進行係・記録係・時計係・点検係）を最初に明確化させることも重要である。その他の留意事項として、「授業中の教師の発言では、学生を批判する内容は一切せず、良いところを見つけるこ

とに努め、一貫して受容的な態度で接します」（本書 四〇頁）という点をあげることが出来る。ともすれば、大学教師は学生の否定的な面ばかりに目が向きがちであるが、このように肯定的な面をできる限り見つけるといふ努力を忘れてはならない。

本書では、随所にコラムが掲載されている。たとえば、「教師は教壇を離れよう」というコラムがある。教壇から下りて学生のそばに近づいて講義し、学生同士の話し合いに対してアドバイスをしようという提言である。学生が座っている場所に教師が近づけば、内職・私語・居眠り・携帯メール使用を防止する効果も期待できる。科学史研究の泰斗である中山茂氏によれば、教壇から離れ、講義ノートを見ないで身振り手振りで講義するスタイルを「ダイナミック・レクチャー」と呼ぶ。講義ノートを読みながら板書する、いわゆる「チョーク・アンド・トーク」の教師主体の講義だけでは、学

生参加型の大学授業の実践は不可能である。

最近、学生の学力低下が問題視されているが、それについて議論する前に、大学教師は自らの授業スタイルや授業観を問い直す必要がある。日本における大学授業の実態について述べた杉江氏による以下の言葉は至言である。「授業の内容を本当に理解しなくても、教師はそのことを追及しません。分かったふりと教えたいものの繰り返しの中で、『学び』はセレモニーだとさえ思い込んでいるかもしれません。大学で、急に理解することを求め、記号でなく記述で答えるなどということとは、不慣れに違いありません」(本書 二二頁)。学習者である学生の「レディネス(教育心理学用語で、新しい学習に入る前の学習者の準備態・予備知識などをさす)」を教師が把握しないまま、教師主体の講義形式の「斉授業」では、学生は新しい知識を十分に理解できるはずがない。大学教師の間で常識となつて

いる大学授業の方法や筆記試験の方法を改めて見直すべきであろう。本書で紹介している杉江氏の「公認カンニングペーパー」のアイデアは賛否両論に分かれると思われるが、単位認定の筆記試験において一度試してみる価値はある。

なお、本書に関連する図書として、ジョンソンD・W「ほか」著、関田一彦監訳『学生参加型の大学授業・協同学習への実践ガイド』(玉川大学出版部、二〇〇一年)、ジョンソンD・W「ほか」著、杉江修治「ほか」訳『学習の輪・アメリカの協同学習入門』(二瓶社、一九九八年)、アルフィ・コーン著、山本啓「ほか」訳『競争社会をこえて・ノー・コンテスの時代』(法政大学出版局、一九九四年)、杉江修治著『バズ学習の研究・協同原理に基づく学習指導の理論と実践』(風間書房、一九九九年)、レイボウ・J・C「ほか」著、丸野俊一「ほか」訳『討論で学習を深めるには・LTD話し合い学習法』(ナカニシヤ出版、一九九四年)

などがある。これらを通して、「協同学習」や「LTD話し合い学習法」の理論的背景と多様な実践事例をより詳しく知ることができる。

(玉川大学出版部、二〇〇四年)

あんどぅ・ともはる

名古屋芸術大学

